HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	札幌農学校の建築
Author(s)	越野, 武
Citation	北大百年史, 通説, 642-670
Issue Date	1982-07-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30030
Type	departmental bulletin paper
File Information	tsusetu_p642-670.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

札幌農学校の建築

越野　武

札幌農学校の建築中、草創期の演武場および附属農校園施設、博物場、また一九〇三年（明治三六）移転後の図書館、昆虫学及養蚕学教室などが遺存している。これらは日本の近代建築史上貴重な遺産として評価され[1]、個別の研究も多い。本稿は、すでに失なわれた建築も含め、明治期の農学校建築――明治末期の東北帝国大学農科大学時代の建築も含めた――を通覧しようとするものである。

写真、図版のうち、『写真集北大百年』に掲載されたものは省略し、(c.a)として図版番号を記しておいた。

一　初期札幌農学校の建築

一八七五年（明治八）、札幌学校として開校してから、一九〇三年（明治三六）、当時の農校園の一画、現在の北大農学部構内へ移転するまでの、初期札幌農学校キャンパスは、周知のように、現在の演武場位置を含む、北一、二条、西一、二丁目にあった。これら四街区のうち東側の一部を除いて、南北一二〇間、東西一一二間二尺五寸、一万三四九〇坪（約四万四五〇〇平方メートル）の地積を占める。これに隣接して北三条西一丁目の一街区三六〇〇坪（約一万一九〇〇平方メートル）が一八七八年（明治一一）、開拓使勧業課から移管されて一時植物園とされ、後教師館敷地に転用されている。

この時代のキャンパス内建築は、簿書「十五年　札幌農学校引継書　管理局」中の「建築一覧表」[2]（表1）および添付配置図（図1）によって、概そを知ることができる。追って述べるように、構内の主要建築は、一八七八年（明治一一）の演武場竣工をもってほぼ揃い、北講堂が焼失再建されたのを除けば、一九〇三年（明治三六）移転まで大きな変更を受けていない。キ

表1　初期札幌農学校建築一覧表（「十五年　札幌農学校引継書　管理局」＊印は現存建築）

	建立年月	総建坪（坪）	建築費（円）	増築	増築費（円）
校舎	1875年8月	411.414 外ニ2階79.000	金12,919.203	1877年6月生徒舎2階建増43坪925ニシテ此坪数総建坪江合算ス	金　978.000
北講堂	1873年10月	114.457 外ニ2階57.500	金 9,882.564 米10石36.348 味噌31貫9036	1876年7月模様替及ヒ建増奥棟此坪数総建坪江合算ス	金 3,530.805
書庫	1876年12月	15.000 総2階	528.527		
化学場	1877年8月	36.000 総2階	5,499.966		
＊演武場	1878年9月	113.550 総2階 外ニ入口 2.775	4,748.500	1881年7月自鳴鐘楼ニ改築ス	金 1,329.682
観象台	1880年8月	4.1169	966.637		
厩	1873年10月	33.500	60.000		
温室	1876年11月	49.100	2,231.081		

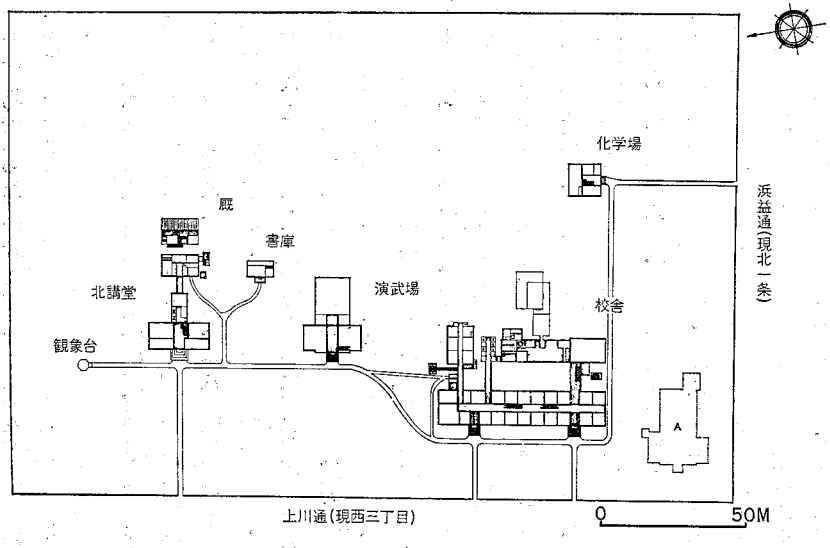


図1　初期農学校配置図（引継書添付図より作図．Aは現演武場位置）

ャンパス西寄りの中央に演武場、その北に北講堂、書庫、南に寄宿舎、南東に舎密所（化学講堂）を配していた。舎密所を除いて、他は全て、西面、開拓使本庁舎に正対して建てられている。

以下、これらの建築について順次眺めていこう。

1　北講堂

一八七五年（明治八）開校時に準備された校舎は、北講堂と寄宿舎のふたつである。後者は新築であるが、前者は一八七三年に建てられた開拓使外国人顧問宿舎のひとつ、洋造弐邸（外国教師五人住居、また俗にケプロン館とも呼ばれた。図2）を改装転用した。H・ケプロン以下開拓使の御雇外国人の大部分が、このころまでに任務を了えて帰国しており、宿舎は不用になっていたからであろう。

木造二階建ての、簡素ながら重厚な印象を与える建築であった。寄棟屋根の軒四周に蛇腹をめぐらし、玄関吹放ポーチにペディメント付の小屋根をかけている。窓は内開きのガラス窓、鎧戸付き、窓上に、一階は三角の、二階は櫛形のペディメントを飾っている。洋造弐邸と同時に建設された他の官舎、宿舎群のなかでは、きわだって古典的な作風を示す作品であった。おそらくは、舶載の手本から、あれこれの様式、技法を試みた習作のひとつであった。開拓使後期、ほぼ一八七七年（明治一〇）を境にして、このような古典主義的手法は捨てられるようになる。

宿舎から講堂へ転用される際の改装がどのようなものであったかは、必らずしもはっきりしない。『開拓使事業報告第二篇・家屋表』（一八八五年刊）の、一八七五年新築の項に、「上川通（現西三丁目）・同（農学）校講堂幷湯呑所・一一四坪四五八・五月起工・七月竣功・経費二、二七四円五一一」（　）内は引用者）と記されている。同表一八七三年の「外国教師五人住居」は、面積七五坪八五〇――同表の面積は原則として建坪（一階面積）で表記されており、延床面積ではない――であったから、その差、三八坪余を増築したと考えることができる。開校時の写真（c.a.20）によると、主屋南側に二間角ほどの張出を設け、そこから南東へ廊下を延し、平家建の一棟に連絡している。この部分は、洋造弐邸時代にはなかった。また軒装飾をつけ、窓も上下げ窓としていて様式的にも主屋とは異なっている。一八七八年の増築部分に相当すると考えてよいであろう。『札幌農業第一年報』（一八七七年）に、「更ニ一個ノ建出シノ長サ三十五英尺幅二十五英尺ナル者ハ之ヲ僕室厠所及ヒ衣服薪炭ノ類ヲ置クノ所トス」とある部分である。

主屋内部の平面は、この時には、ほぼ旧状のまま講堂に転用

されたようである。『第二年報』（一八七八年）に、「北校内部の整置は大ニ之ヲ変換改良シ扣所ノ無用ナルモノ数個ヲ廃シテ之ヲ一二個（原文 three）ノ便利ナル講堂ト為セリ　其階上ハ……講堂製図室幷ニ理学及ヒ機械学ノ器械室各一個アリ　階下ハ予科ノ為メニ須要ナル三個ノ講堂ト一ノ読書房トナリ」とあり、これは『事業報告・家屋表』一八七九年修繕の項にある、「上川通・農学校間内模様替並生徒溜引建直・十年十二月起工・五月竣工・経費一、一八九円一八五」の「間内模様替」に相当しよう。また「生徒溜引建直」は呼称に疑問は残るが、前記主屋南東の別棟「僕室厠所」を、主屋東裏へ移築したものと解したい。一八七五年竣工の「書庫」に近接しすぎて具合が悪かったからであろう。「引継書」添付配置図に図示された姿がこの時できあがったのである。一八七八年撮影（推定）の市街パノラマ写真（c.a.46）中にみえる北講堂は、背後の付属建物を含めてこの図によく合致している。

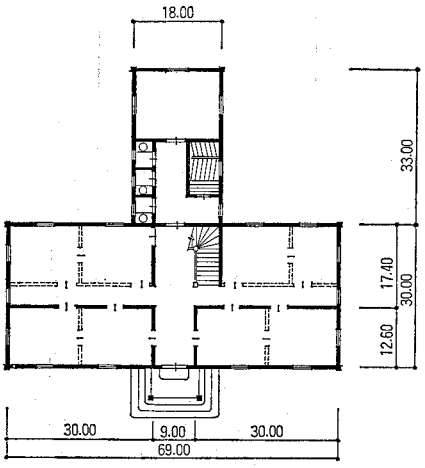


図2　北講堂（洋造弐邸）平面図
破線は1878年撤去された間仕切壁を示す。北大附属図書館北方資料室蔵「西洋弐番邸二階造地絵図」および引継書添付図より作成

北講堂のその後については、特に記すことはない。一八八八年（明治二一）五月焼失し、翌一八八九年、同じ位置に規模を拡大して新北講堂が再建された。

2　寄宿舎

「引継書」に「校舎」とあるが、生徒寄宿所、生徒舎などとも呼ばれた。『事業報告・家屋表』一八七五年（明治八）新築の項に、「上川通・農学校寄宿所・三七七坪七四七・六月起工・八月竣功・経費一二、七九〇円〇〇〇」と記されている。数葉の外観写真（c.a.30, 46, 57）のほか、創建時の平面図（図3）、前出「引継書」配置図があり、さらに在学生の手記、例えば太田書簡中の略図（c.a.56）があって、建物の概要を知ることができる。一階平面は、両平面図にほとんど差異はない。ただ、後方賄所から突出した棟が加わり、主屋北端の事務室、廊下が変更された。後方の増築は、『事業報告・家屋表』一八七五年新築の項に併記された「札幌学校麺麭焼所幷雑

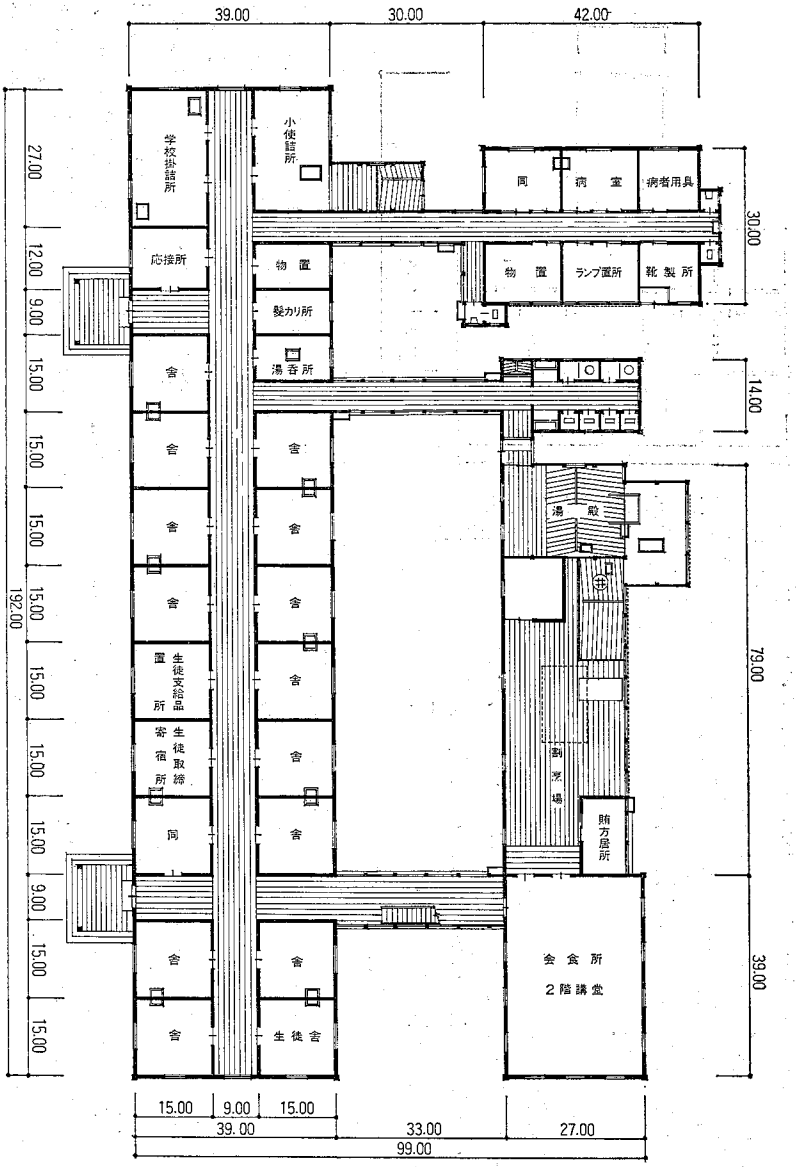


図3　寄宿舎平面図

北大附属図書館北方資料室蔵「男生徒寄宿所絵図面」より作成

蔵・三三坪六六七」である。両者の建築面積計四一一坪四一四は「引継書」の記載に合致する。「麵麭焼所」は、いうまでもなく、パン焼所である。(3)

二階は、一八七八年（明治一一）八月、生徒増にともなって主屋中央に六室分を増築したものである。

建物全体は、西側主屋と、東側の付属屋を並列させる計画である。西主屋は主として寄宿室からなる。各室は一五尺角の正方形平面で、一階中廊下をはさんで東西に一四室、二階に増築分六室を配していた。「農学校沿革略」などでは二四室とあるから、あるいは一階一八室の計画であったかもしれない。官費生定員五〇名であったから、一室二～三名の想定であろう。主屋北端には、「校長室、事務室、当直室……」の管理諸室が設けられていた。

東側の付属棟へは三本の廊下で連絡する。南端二階建ての部分は、一階を食堂、二階を復習講堂として使用した。食堂に接して平屋の賄所が設けられている。中央の廊下は便所、浴室へ、北端の廊下は平屋の別棟へ連絡する。この別棟は、外観、平面とも寄宿舎主屋に準じているようであるが、病室、物置、靴製造室にあてられていた。

建物外観の意匠は、開拓使工業局前期の特徴をまだ残している。窓は各室あて一個。やや大ぶりの上下げガラス窓で、三角ペディメントを飾っている（ただし、二階増築部では省略された）。背後の食堂・復習講堂棟では、一階を三角、二階を櫛型ペディメントとしている。主屋の軒には初期の洋風官舎、北講堂増築部と同様の、玉縁飾板をつけている。演武場の犬歯状飾板と同じく、アメリカ合衆国の木造建築にしばしば見られるスタイルである。食堂棟の軒は飾板のない水平蛇腹で、窓の意匠とともに、洋造弐邸に準ずるものであった。

3　書　庫

一八七六年（明治九）、北講堂の南隣、演武場予定地との間に、木造二階建て、建築面積一五坪の小さな書庫が建てられた。「農学校引継書・建築一覧表」に、一八七六年十二月建立とあるほか『札幌農黌第一年報』（一八七七年）に「二階造リノ一小屋ハ是レ新築ノ文庫ナリ」と記されている。ただ『事業報告・家屋表』では、一八七七年十月竣功とされている。この誤記の理由はわからないが、あるいは次に記す「読書房」ととり違えたものかもしれない。

独立の「書庫」とあわせて、翌一八七七年、北講堂内に「読書房」が設けられた。『第二年報』（一八七九年）中W・ホイーラー報文に「客年九月中本黌ノ読書房ヲ北校ニ設ケ」とある。このように書庫と読書房が別棟にあったのでは不便この上な

い。W・ホイーラーの「農学校校長調所広丈宛書簡」（一八七七年九月二十日）[4]に、「客年教官ト協議ナク取建テラレタル木製ノ文庫ハ……内外ノ観更ニ風致ナキノミナラズ殊ニ不安全」と、不評であった。

書庫の姿を伝える資料は少ないが、『北海道志・巻二』中の農学校鳥瞰図（c.a.63）に描かれるほか、北方資料室所蔵の写真一葉がある。用途上当然であるが、簡素な「風致ナキ」建物であった。写真では、書庫前方に別棟が建増されているが、一八九〇年建築の「書籍庫事務所」であろうか。[5]

4　化学講堂

一八七七年（明治一〇）、キャンパスの南端、寄宿舎の東背後に化学講堂が建てられた。『第一年報』によれば、「製煉所ノ結構装置ハ都テ教師 D.P.Penhallow ノ調成セル図ニ法リタル者」であった。Chemical Laboratory は、「製煉所」のほか、「化学場」「舎密所」などと訳され、のちには「南講堂」とも呼ばれたようである。

建物の概要については「引継書・建築一覧表」に、「化学場・明治十年八月建立・総建坪三六坪総二階・建築費五、四九九円九六六」とあり、添付配置図に六間×六間の書込みがある。このうち建築面積は、史料によって少し喰違っている。一括して示す。

『第一年報』　四〇（ママ）平方尺（forty feet square）
『事業報告』　四六坪二四〇
「官有財産目録」[5]　四五坪五六六

遠望写真（c.a.23, 46）[6]によると、方形屋根をかけた正方形プラン、総二階建ての単純な概形を有し、付属屋や突出翼部は見あたらない。したがって、右の建築面積のうち、『事業報告』の四六坪二四〇は、方四〇・八尺「官有財産目録」の四五坪五六六は、方四〇・五尺ということになろう。演武場や農場建築では、米人教師のフィート完数による平面設計を、間制――六または三尺モデュール――に直すことなく実施しているから、化学講堂も方四〇尺、建坪四四坪四四四と考えるのが自然である。他は計測の見誤りとしておきたい。

さて、内部一階には「生徒ノ普通製煉所（general laboratory 学生実験室）ト分析室ト天秤及ヒ竈場（furnace-room）二階ニ「講堂ト機械室（apparatus room）ト鉱礦学地質学及ヒ化学採蒐物ノ展列場」（『第一年報』）が設けられた。さらに地階があって、資料類の保管庫、整理作業室にあてられていた。

建物外観の詳細はわからないが、窓は一、二階とも、簡素な上下げ形式に統一されている。北講堂や寄宿舎の古典的ペディメント装飾は見られない。軒も、水平繰形や飾板にかわって、

間隔を広く配した持送り形式が採用されている。これらの意匠は、いずれも開拓使後期の洋風建築の傾向につながるものとして注目しておきたい。

5 演武場

時計台の愛称で親しまれてきたこの建築については、すでに各方面からの論考も多く、特に書き加えるほどのことはない。建築の意匠、構造に限って、二、三記すにとどめよう（c.a.29, 73, 95, 96 など）。

演武場は、一八七八年（明治一一）六月着工、同年十月十六日竣工、開業式を挙行した。周知のように、時計塔は、米国ハワード社から購入した時計にあわせて、一八八一年あらたに造り直された。『事業報告・家屋表』は次のように記載しており、「引継書」と大きな相異はない。

明治十一年新築・上川通・演武場博品函・七月起工・十二月竣功・経費七五三円〇五四
同・同・農学校演武場・一棟・一一六坪三二五・六月起工・十月竣功・経費三、八六九円一六三
明治十四年新築・上川通・農学校時計台・五月起工・八月竣功・経費一、三二九円六八二

演武場の計画については、遠藤明久、秋月俊幸によって詳しい経緯が明らかにされている。[7] 農学校の側では、当初、煉瓦造二階建ての「農学本館」と木造平屋の「煉兵館」二棟の建設が目論まれていたが、両者を縮小併合して、木造二階建の一屋とされたという。

W・ホイーラーの前出「調所広丈宛書簡」（一八七七年九月二十日）[4]によれば、農学本館には集会用の「正堂」、地質・鉱礦学、動物学などの「展覧場」、本草学、林学などの「博物場」、土木・機械学などの講義室を設け、さらに屋上に時計台をそなえる計画であった。結局この計画は裁可されず、博物室、講義室を一階に、練兵館（演武場）を二階に配する、現在の姿にまとめられた。二階演武場は、必然的に「臨時諸般ノ衆覧、祝賀、成業式……夜宴並ニ演説等ノ用ニ供」されることになった。建物位置も、農学校本館を兼ねて、キャンパス中央を占めたのである。

終始これらの建築計画をとりまとめたのは、右の書簡にもあるとおり、W・ホイーラーである。縮小案を提示した書簡（一八七八年一月二日。c.a.54）には、一、二階平面図と、九項目からなる簡単な仕様 General Directions が記されている。実施設計は、開拓使工業局技師の手でまとめられたが、遺構によってみても、ホイーラーの指示は、ほぼ忠実に守られたことがわ

かる。ホイーラーの指導が、工業局技師とのやりとりの中で、もっと細かなところまで及んだであろうことは、次に述べる農場建築についての『年報』の記述からもうかがうことができる。

演武場の建築でまず目をひくのは、小屋組の構造である。ホイーラーの仕様に、

3　The roof to be trussed so as to avoid the necessity of posts or columns in the Hall

4　No ceiling to be provided in the Drill Hall, but the roof-trusses, and roof-members to be dressed, and painted a sky-blue color

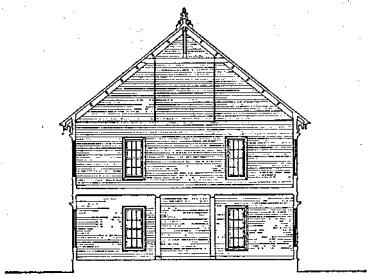


図4　演武場断面図

とあるように、二階演武場 Drill Hall は天井を張らず、化粧小屋組があらわされている。合掌材の錐力を、上部のつなぎ梁 collar beam と、下部の鉄筋 tie bar で支える軽快な構造形式である。母屋をはじめ各部材は、幅の狭く丈の高い、いわば厚板に近い断面を有する（c.a. 83, 99　図4）。重厚な梁、束を組みあげる伝統的な和小屋を見なれた目には、むしろ不安をおぼえるほどの軽快さである。開拓使の建築技術者にとってもそうであったろうが、不安感は、この新構造の母国でも同様であった。Balloon-frame 構造という名は、風船のように軽く、すぐに壊れるだろうという蔑称に由来している。

Balloon-frame 構造については、あとでまたふれたいと思うが、要約すれば、厚板様断面材、あるいは半割柱を釘打で組みたてる簡易な木構造である。その特徴は壁の軸組構造に端的にあらわれる。軸組に「柱」を使わないのである。ホイーラーの指示は、当然そこまで含んでいたと思われるが、はたして実施されたかどうか、興味あるところである。現状では「柱」が使われている。一九六七年（昭和四二）の修理工事に際してこの点が問題となった。確証は得られなかったが、筆者は、現状の柱は後の挿入であろうと推定している。創建時には、壁軸組も半割柱で組みたてる Balloon-frame 構法によったと考えるのである。(8)

次に、ホイーラー仕様の中で、

7　Windows to be hung in American fashion

とされていることも注目してよいであろう。どういう点が「アメリカ風」であるのか判然としないが、例えば北講堂のよう

に、ペディメントを飾った鎧戸付両開き窓に対して、装飾を排した簡素な上下げ窓をさしていると考えられないだろうか。このことは開拓使（札幌本庁）の洋風建築が、農学校の諸建築をほぼ境にして、後期には、上下げ窓一辺倒に変ることとかかわってくるように思われる。開拓使後期の建築といえば、豊平館（一八八〇年）が代表作である。建物の格式の高さや、玄関ポーチの古典主義的意匠にかかわらず、本体の開口部は意外なほどあっさりしている。演武場の建築は後期の洋風建築の平明簡潔な意匠に、連なっていると考えてよいであろう。

演武場の軽快な意匠は、外観四面に大きくあらわされた切妻面に最もよく表現されている。この意匠は平面を十字形に整えたことによっている。十字形平面が、単に室配置から決められたのではないことは明らかであるし、キリスト教会堂の象徴的形式であるラテン十字形平面にまで遡行するのも考え過ぎであろう。十字形プランの住宅はアメリカでしばしば見られるし、外観に大きく三角の切妻面をあらわす意匠も、特にニュー・イングランドでは伝統的形式であった。(9) 寄棟屋根の軒四周に蛇腹を廻らす、古典的、重厚な意匠に対して、切妻屋根の変化と軽妙さが好まれたのである。新しい構造形式とともに、いかにもアメリカ的な意匠が演武場にもたらされているのである。

6 観象台

一八七九年（明治一二）、農学校キャンパス内、北講堂前面に、小さな観象台＝天文台が設けられた。『札幌農學第三年報』（一八七九年三月）に、「簡単ノ観象上及緯度経度時辰等測定報告ノ為メ」とあるが、「観象」は 'astronomical observations' の翻訳である。これとは別に、一八七六年、教師館（旧開拓使本陣。現南一条東一丁目）屋上に、観象場（metereological station）が設けられ、気象観測が始められていた。クラーク博士帰国の記念写真（c.a.38）に見える塔屋がそれであろう。

観象台の創建年は「引継書・建築一覧表」に「明治十三年八月」となっているが、『第三年報』に「已ニ着手セリ」『第四年報』（一八八〇年三月）に「全ク竣工セリ」とあるから、『開拓使事業報告・家屋表』の「明治十二年五月竣功」と考えておきたい。

建物は「直径十二英尺八角ニシテ屋背ハ半球形ヲナシ其回転ヲ自由ナラシメ」るものであった。その姿は一八八九年頃の写真（c.a.73）によく記録されている。観象台南方、寄宿舎前（現演武場西南角にあたるという）に石造の子午線標が設けられていた。観象台は明治二十年代ではあまり使用されず、三十年ころには姿を消していたようである。(10)

7　新北講堂

一八八八年（明治二一）五月、[11]北講堂が焼失し、翌一八八九年、同じ位置に新しい講堂が建てられた。この建築については、二、三の写真（c.a. 29, 73, 96）を除いて、詳細な記録は残されていないようである。旧講堂より規模は大きく、一九〇〇年ごろには、階上は「土木工学科教室、製図室」、階下は「動物学実験室、物理学器械室、農業経済学演習室、予修科教室、森林科教室及び教官室」[12]にあてられていた。

左右の翼部をやや突出したH形平面は、豊平館の姿に似ている。ただし翼部正面は古典主義的なペディメントとせず、演武場と同じ簡素な十字飾付きの切妻をあらわしている。軒には犬歯状飾をめぐらすが、これも演武場の意匠にあわせたのであろう。中央玄関は切妻吹放のやはり簡素なものであるが、ここにも華やかな軒飾が見られる。これらのアメリカ風の軒飾は、初期洋風建築に広く用いられ、開拓使初期の建築でも時に試みられたが、後期以降稀れになったものである。

新北講堂は、農学校移転（一九〇三年）後、辺見病院、創成病院に転用され、一九五五年（昭和三〇）ごろまで遺存していたようである。[13]

8　温室

一八七八年（明治一一）二月、キャンパス北隣、北三条西一丁目の開拓使勧業課属地三六〇〇坪が農学校に移管され、本草園＝附属植物園とされた。ここには、一八七六年、L. Boehmer設計の温室が建てられていた。四九坪一〇の木造温室である。これは、一八八六年（明治一九）、現在の植物園に移築された。移築後一八九七年（明治三〇）ごろの姿を旧写真[14]で見ることができる。

9　官舎

前記北三条西一丁目本草園および北三条西二丁目旧開拓使勧業課葎草（ホップ）園に、一八八四年（明治一七）、外人教師官舎三棟が建てられた。

農学校開校時には、開拓使旧本陣を教師宿舎に転用していたが、これは一八七九年（明治一二）に焼失しており、その後は北一条西四丁目の開拓使官舎（小樽通官舎）四棟がその用にあてられていた。一八八四年、うちW. Brooks教授宅焼失を機に、農学校外人教師専用の官舎として新築されたのである。

木造二階建て、建築面積四九坪余の住宅であった。二階は小屋裏を利用するもので、第二次大戦後普及した中二階住宅タイ

プの早い例として注目しておこう。これら三棟は、一九〇七年（明治四〇）、それぞれ附属植物園西端、北八条西五丁目（さらに北十一条西三丁目）、および北大南門西脇に移築された。いずれも最近まで遺存していたが南門西脇の一棟を除いて取りこわされた。詳細は遺構の実測調査報告書を参照されたい。(15)

10 博物場

一八八四年（明治一七）七月、北海道事業管理局札幌農業事務所管の札幌博物場が、その属地一万三八〇〇坪余とともに、札幌農学校へ移管された。現在の植物園内、農学部附属博物館である（c.a. 101, 103）。

博物場は、一八七七年（明治一〇）開拓使によって、北七条西七丁目偕楽園内に設けられた仮博物場に始まる。程なく、一八八〇年には、現植物園地、旧牧羊場に本建築が計画された。翌一八八一年秋着工、一八八二年六月竣工している。(16)

「札幌博物場札幌牧羊場札幌育種場引継書類」(17)によれば、建坪七九坪四三八、代価三八三八円一一二であった。

建築遺構は創建時の姿をほとんどそのまま残している。建物は木造二階建てであるが、中央梁間三・五間の二階建て本屋の左右に、一階下屋を付加した構成がとられている。一階後部を左右に突出してT型平面としているのとあわせ、典型的な教会堂バシリカの形をなぞっている。左右の下屋正面を、三角の切妻面につくり出し、大小の切妻を三つ並べた姿に見せている。玄関ポーチも正面に葺下ろした屋根に、切妻の小屋根をのせている。正面中央の切妻三角面は縦羽目板張とし、化粧の斜材を付けている。二階側面にも付柱が飾られていて、ハーフ・ティンバー風の意匠が試みられているのがわかる。窓は上下げ形式であるが、正面二階に三連窓、左右下階に二連窓をあけ、細かな装飾をつけている。

このように全体にやや華やいだ印象の作風は、それまでの開拓使洋風建築とはかなり隔っている。建物の竣工する前、一八八二年二月に開拓使は廃止されていたから、博物場は開拓使の手になる最後の作品ということになろう。そして、理由は定かでないが、この建築の設計は、ボストンの建築家ベートマンに依頼された。一八八〇年末までにできていたはずの原設計図は紛失していて確認できないが、実施にあたってはかなり手が加えられたと考えられる。ただ、右に述べたような一風変わった意匠は、原設計に由来するのであろう。(18)

11 農校園の建築

初期農学校の最後に、農校（圃）園、つまり附属農場の建築

についてふれておこう。農校園は、一八七六年（明治九）、札幌農学校開校式の翌九月、開拓使勧業課属地三〇万四五〇〇坪を移管したのに始まる。校園面積は、一八八二年開拓使廃止時までに、一四六万五〇〇〇坪余に増加していた。場所は、いうまでもなく、現在の北大キャンパス地である。

一八八二年までに設けられた建築施設の一覧表と配置略図をあげておいた（表2、図5）。現在のキャンパスと対応させていえば、派出所（校園事務所）が大学本部建物の西隣、家畜房が百年記念会館北側にあたる。

開園後最初に建てられたのが、模範家畜房（Model Barn 図6）と穀物庫（Corn Barn 図7）である。家畜房の竣工は、一覧表に一八七七年一月とあるが、『第二年報・校園報文』（一八七八・二）に「模範家畜房ハ恰モ我乾草及飼草ノ大収穫ヲ納ルヽノ時ニ落成シ早秋玆ニ牛馬ヲ移シ」とあって、一八七七年初秋と考えられる。(19)

『第一年報』冒頭報文（W・S・クラーク）は、特に「規範家畜房」の項を設け、口絵（c.a. 39）、平面図などを添えて、詳細な説明を加えている。「一般ノ模範トモ為ル」ためであった。以下、報文を引きながら建物の概要を見ていこう。

建物の「桁行ハ一百英尺其梁間ハ五十英尺地上ヨリ簷（eaves）ニ至ル柱ノ高ハ二十五英尺ニシテ四側皆樅（spruce）ノ堅蔀板

表2　農学校園建物調

種類	棟数	建坪（坪）	原価（円）	落成年月
房増所所増庫庫所	1棟	138.88	4,813.988	1877年1月
		68.28	2,325.395	1879年6月
畜建糖出	1棟	32.5	1,233.137	1879年10月
	1棟	31.	1,270.853	同
▼同器穀		6.	41.028	1882年12月
＊建械物	1棟	100.	1,505.837	1875年
＊排水管製造	1棟	33.3	709.653	1877年10月
	1棟	50.	624.985	1879年9月
同	1カ所		504.96	1880年7月
同同	1棟	33.25	181.835	同
同同	1カ所		273.45	1879年7月
同	1棟	21.	114.844	同
大工	1棟	24.	72.	1880年11月
同工		6.	50.55	1881年11月
鍛冶	1棟	4.	37.84	1880年11月
薫肉	1棟	4.	37.17	1882年2月
総計	11棟 2カ所			

備考　「十五年　札幌農学校引継書　管理局」より作成。▼内は「明治十六年　農学校引継書類」による。＊印は現存建築

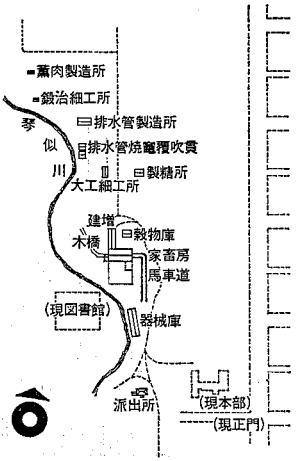


図5　農校園建物配置略図
「農学校引継書」付図をもとに作製したが，おおよその位置を示すにすぎない。参考のため，現本部，図書館，西5丁目通街区を描きこんだ。

ヲ張リ詰メ幅二英寸ノ目板ヲ打チ屋根ハ鋸了柾(spruce shingles)ヲ以テ之ヲ葺」いた。英尺(フート)は日本尺に代えて実施されたと想像されるが，建築面積は一覧表の一三八坪八八に合致する。

地階には「糞窖」および「大根類ヲ入レ置クノ窖」がとられ，西妻側に，西下りの地形を利用して「家猪ヲ入ルヘキ内庭」が設けられていた。一階「牡口床」(Stock Floor)は「牛馬圏及ヒ箱圏ニ用ヒ牡口ハ総テ容易ニ(南側の)内庭ニ出入スル」ようにされていた。内庭の東側には，四〇×三〇英尺「開放シノ……搬車等ヲ係置スル」小屋が建てられる予定になっていた。この小屋は一覧表にないが，旧写真(c.a.106)に見える吹放しの附属小屋であろうか。また，家畜房北側西端に，六〇×三〇英尺，二階建の「傍屋」を設け「牡牛，仔牛，羊及ヒ伝種若シクハ肥養家豕」を入れる計画であったが，これは一八七九年(明治一二)「家畜房建増」として建築された。

さて，家畜房二階は「秣床」(Hay Floor)，つまり干草収納の空間で，中央に「馬車道」を通し，両側に「秣置場」を配した。干草は床の揚戸から下階へ落すように工夫されている。両妻面には傾斜路がつくられ，直接二階の「馬車道」へ通ずるようになっていた。傾斜路は，東側は土手を築き，西側は木橋とされた。西妻面の豚用内庭をまたぐためであろう。

家畜房とほぼ同時に，その北隣に穀物庫が竣工した[20]。『第二年報・校園報文』に「玉蜀黍貯蔵場」として説明が加えられている。「其家作ハ米国風ニ之ヲ築造シ柱ノ長ケハ十五英尺ニシテ幅四十英尺長サ三十英尺」の建物であった。建物全体を「一尺四方ニシテ長ケ七英尺ノ十六本ノ石柱[21]」の上に据えて，鼠，野兎の害を防ぐように工夫されている。

家畜房の基本設計は，W・ホイーラーによって作製された。穀物庫も同様であったと考えてよかろう。『第一年報』に，次のように記録されている。

家畜房ノ図ハ……Wm. Wheeler 之ヲ製シ其計画及ビ仕様書モ亦タ同氏之ヲ縮メ(ママ)(furnished)且ツ米国風ノ屋架ノ切組建絵図(an isometric drawing of the frame in Ame-

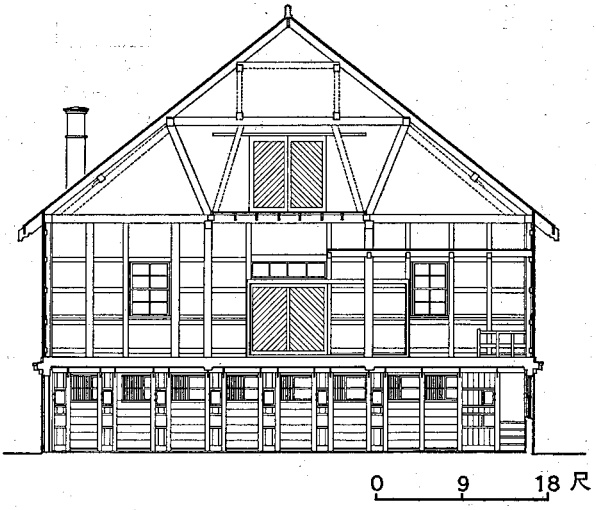


図6　模範家畜房断面図
小屋組の破線で示した部分は移築時の補強挿入材を示す。

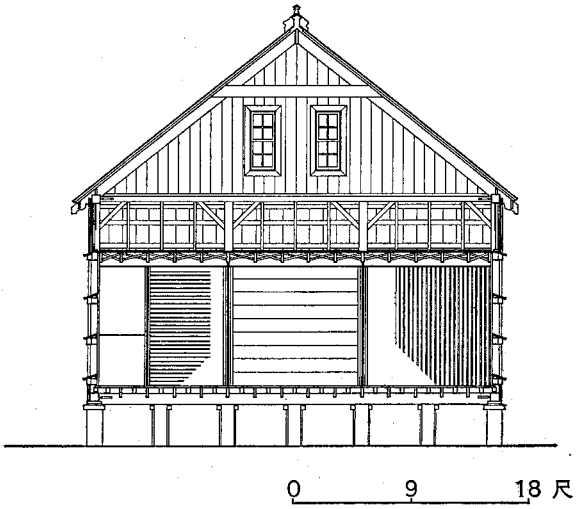


図7　穀物庫断面図

rican style）モ亦タ同氏ノ手ニ成リ……実業図ハ本使ノ木工長安達氏巧ミニ之ヲ製シ且ツ同氏ハ其工業ノ仕法ヲ質問シ又タ其施業ヲ監督スルニ最モ執着ノ様子ナリキ

開拓使の主席建築技術者、安達喜幸（一八二七～八四年）が、新来の「米国風ノ屋架」の構造法を、熱心に習得しようと努める様がうかがわれる。この構造は、先にふれた Balloon-frame であった。家畜房遺構の小屋組は、移築に際して補強改造されたが、なお、合掌材の、著しく丈が高く幅の狭い断面（実測で約二五×五センチメートル）に、この軽木構造の特色はよくあらわれている。二階 Hay Floor の、広大な空間の印象は、この軽構造によって一層強調されているのである。

Balloon-frame 構造の特色は、穀物庫にもっとはっきりとあらわれている。厚板様の根太を組んだ二階床や、上階のカラー・ビームで合掌を支持する小屋組は、この構法の典型的なものである。十九世紀中葉に多く出版された開拓者のための建築手引書に、Balloon-frame の isometric drawing が載せられているが[22]、これは穀物庫の構造に酷似している。

この近代的な軽木構造が、そのまま日本に根を下ろすことはなかったが、近年あらたに移植されようとしている「ツー・バイ・フォー構法」の先駆例として注目しておきたい。また、農学校以降の開拓使系洋風建築に、この構法の実用主義的な性格が、強く作用したことは否めないのである。

農校園の諸建築のうち、模範家畜房、穀物庫および家畜房建増（切りはなされて種牛舎）の三棟は、一九〇九（明治四二）～一九一〇年、第二農場に移築されて現存している。また派出所の建物（c.a 113）は旧位置のまま残されて、昭和三十年代には大学本部庁舎として使用されていたが今はない。

二　後期札幌農学校の建築

一八九八年（明治三一）十月、札幌農学校商議委員会は、校舎移転を議決した。校舎新営の予算は、同年十二月、衆議院を通過した。

一八七五年（明治八）札幌学校開校以来の旧キャンパスは狭く、市街の成熟にともなって、位置も適わしいものではなくなっていた。校舎もようやく老朽を加えていたであろう。新キャンパスは、附属農場の一画が選ばれた。いうまでもなく現在の本学農学部位置にあたる。

翌一八九九年六月十三日、起工式が行われ、十六日から工事が開始された。予算は二五万八〇〇〇円、五ヵ年継続事業の計画どおり一九〇三年七月三十日、ほぼ工事を了えて移転した。

この間、新営された校舎、寄宿舎などについては農学校簿書[23]「営造物領収証回送ノ件」（一九〇五年八月二日）中に、総リ

ストがあるので、このうち主要なものを表3に示しておく。新築建物三八棟（渡廊下、門、橋などを除く）、ほかに旧建物の増改築、煖房機械などを含めて、総額二五万七九〇九円余の工事であった。五カ年にわたる工事の進行状況は、おおむね次のとおりである。

第二年度（一九〇〇年八月～一九〇一年六月）　農学教室
第三年度（一九〇一年五月～十二月）　動植物学教室、農業経済学及森林学（農政学）教室、昆虫学及養蚕学教室
第四年度（一九〇二年七月～十二月）　理化学及地質学教室（農芸化学教室）、図書館
第五年度（一九〇三年六月～十二月）　寄宿舎、煖房機関室および煖房機械、雨天体操場

1　設計者中條精一郎[24]

これら後期農学校キャンパスの建築群は、文部技師、中條精一郎（一八六八～一九三六年）の手によって計画、設計された。中條精一郎は、作家中条（宮本）百合子の父として一般に知られているが、明治末から昭和初期にかけて活躍した主導的建築家のひとりである。

中條は、一八六八年、山形県米沢に生まれた。一八九八年、東京帝国大学工科大学建築学科を卒業、文部省の嘱託となったが、翌一八九九年、文部技師・札幌農学校内文部省建築掛出張所長に任ぜられた。札幌には一九〇二年まで滞在、農学校新校舎の設計、監理に従事した。この間、土木工学科建築学講師を兼任している。一九〇二年帰京、文部省総務局建築課設計掛長になり、一九〇三、四年にはヨーロッパへ留学したが、帰国後の一九〇八年、官を辞して、東京丸の内に曽禰中條建築事務所をひらいた。パートナーの曽禰達蔵（一八五二～一九三七年）は、工部大学校造家学科一期生のひとりであり、中條の大先輩にあたる。なお、中條は、旧めかしい「造家学科」の名称が、「建築学科」に改められた第一回の卒業生であった。

曽禰中條建築事務所は、当時、我が国最大の建築事務所であって、その作品は慶応義塾図書館（一九一二年、重要文化財）、日本郵船ビル（一九二三年）など、極めて多数にのぼる。北海道との縁も深く、開道五十年博覧会の建築（一九一八年）、札幌独立教会（一九二二年）、小樽三井銀行（一九二七年）などが知られている。

この間、中條は、一九一四年（大正三）の建築士会創設に尽力、一九二一年には自から建築士会会長に就いている。ただ、事務所内での中條は、もっぱらその経営に意を注いだと伝えられており、自から手を染めた建築作品は少ないのではないかと想像されている。農学校の新校舎群は、おそらく数少ない中條

表3 後期札幌農学校主要建物一覧表

名称	構造	坪数（延床面積）	建築費（円）	保存年限	起工竣工年月日
農学教室	木造2階建（1棟）	231.802（457.802）	35,152.753	45	1900. 8. 7 1901. 6.15
同上渡廊下	木造平屋建（3カ所）	16.000	612.000	25	同
同上温室	同（1棟）	24.000	2,309.559	30	同
同上グラスハウス	同（1棟）	21.000	1,681.747	同	同
同上付属舎	同（1棟）	14.789	1,383.678	45	同
動植物学教室*	木造2階建（1棟）	150.000（298.000）	21,866.134	45	1901. 6. 1 1901.11. 3
同上附属植物腊葉室	煉瓦造平家建（1棟）	24.750	5,116.790	100	1902. 7. 5 1902.12. 5
同上渡廊下	木造平屋建（1カ所）	6.750	356.660	25	同
農業経済学及森林学教室	木造平屋建（1棟）	149.000	11,766.190	45	1901. 5. 1 1901.12. 3
昆虫学及*養蚕学教室	同（1棟）	122.000	9,187.930	同	同
理化学及地質学教室	同（1棟）	291.776	26,135.749	同	1902. 7. 5 1902.12. 5
同上付属窒素定量室	同（1棟）	3.000	390.980	同	同
同上渡廊下	同（1カ所）	1.500	113.020	25	同
図書館読書室*	木造平屋建（1棟）	90.250	7,744.500	45	同
同上付属渡廊下	同（1カ所）	5.000	212.260	25	同
図書館書庫*	煉瓦造2階建（1棟）	36.000（72.000）	6,344.858	100	同
教室煖房汽関室	煉瓦造平屋建（1棟）	38.500	4,019.840	100	1903. 6.10 1903.11.13
教室煖房機械（ウェブスター式）			32,770.394		1902. 3.21 1903.11. 9
瓦斯製造所	煉瓦造平屋建（1棟）	26.950	3,465.070	100	1903. 9. 2 1903.12.10
瓦斯製造機械			5,026.178		1903. 6.21 1903.12.12
雨天体操場	木造平屋建（1棟）	104.000	4,065.942	30	1903. 8.26 1903.12. 9
正門*及鉄柵	硬石及煉瓦造 鉄造	明キ 15尺000 延長 14尺840	323.811 130.449	100 同	1904. 7. 3 1904.10.10
寄宿舎	木造2階建（2棟）	276.000	22,008.528	40	1903. 6. 3 1903.11.10
舎監室	木造平屋建（1棟）	31.750	2,157.547	同	同

名称	構造	坪数（延床面積）	建築費（円）	保存年限	起工竣工年月日
食堂	同（1棟）	50.000	1,990.940	30	同
賄所	軟石造平屋建（1棟）	24.000	1,995.128	100	同
寄宿舎煖房汽関室	木造腰煉瓦積平屋建（1棟）	12.000	677.550	40	1903. 8.26 1903.12. 9
寄宿舎煖房機械（ケルチング式）			9,153.350		1903. 4.30 1904.12.28
（附属植物園）博物館＊	木造平屋建（1棟）	24.000	2,474.177	45	1900. 8. 7 1900. 9.16
（附属植物園）付属事務所					1903. 8.26
（附属植物園）温室	木造腰煉瓦積（1棟）	24.000	1,536.564	30	1903.12. 9
（附属植物園）温室煖房機械			1,130.080		1903.10.22 1903.12.20
合計			257,909.994		

備考　農学校簿書「明治三十八年度会計事務公文録　会計課」の「造営物領収証回送ノ件」（1905年8月2日）中，「御引渡致候農学教室及付属舎ノ建築費相違有之別記ノ通訂正」の別記表より作製。原表はほぼ起工竣工時順に記してあり，かつ項目が多いので，施設毎に配列を変え，主要と思われるもののみを選んだ。所在地，備考の欄は省略した。なお，＊印は現存建築。

自身の作品のひとつということになろう。建築学科を卒業して間もない初心の創造であった。

2　キャンパス計画の概要

新キャンパス計画の骨格は、現在の農学部前庭にほぼそのまま遺されている。一九三五年（昭和一〇）の農学部本館新築にあたっても、この前庭空間は形をかえずに保存されたからである。

札幌農学校学芸会蔵版『札幌農学校』（一九〇二年第三版）に折込まれた鳥瞰透視図「札幌農学校改築教室予定図」(c.a.116)[25]は、中條精一郎の自筆になると思われるが、キャンパス中枢部の計画をよくあらわしている。同図および本学施設課旧蔵図をもとに、配置計画を図8に示しておく。[26]

正面奥、現農学部本館位置に、農学教室（本館）を東面させ、前庭左右に、動植物学教室・農芸化学教室、大講堂・図書館、農業経済及農政学教室・昆虫及養蚕学教室を、それぞれ向かいあわせに配置する計画であった。このうち、大講堂だけは実現せず、同所には一九〇六年、水産学教室が建てられた。中央講堂は一九一六年になって、農業経済学教室のさらに東隣に建てられることになる。

中枢部からやや離れて、現教育学部のあたりに、寄宿舎が建

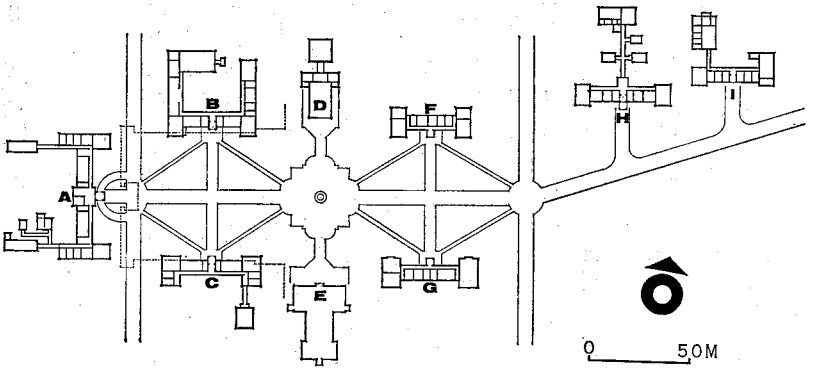


図8　後期札幌農学校配置図

A　農学教室　B　農芸化学教室（理化学及地質学教室）　C　動植物学教室　D　図書館　E　水産学教室（計画では大講堂）　F　昆虫及養蚕学教室　G　農業経済及農政学（森林学）教室　H，I，は東北帝国大学農科大学になってからの林学科教室（古河記念講堂）と畜産学教室。建物A，B，Cの前面の破線は現農学部本館の位置を示す。

てられた。また、この移転新営工事にひき続いて、明治四十年代には、（東北帝国大学農科大学）予科講堂（一九〇八年）、畜産学教室（一九〇九年）、林学科教室（同。古河記念講堂）などが加わっていく。畜産学、林学教室は図8にあわせて示しておいた。

キャンパス中枢部の校舎群配置は、主副ふたつの中心軸によって統一されている。正門からアプローチし、農学本館中央の時計塔に焦点をあわせた東西の主軸と、これに直交する南北の副軸である。副軸上には図書館と、大講堂の共用施設を対に配し、交差点には四葉形の広場をとる計画であった。

副軸をはさんで、農芸化学・動植物学教室および昆虫学・農業経済学教室の各対心まで約一八〇尺、また主軸をはさんで両側各教室の翼部前面まで約九九尺にそろえている。図書館、大講堂はやや後退させて副軸の奥行きを強調している。個々の建築意匠については次に述べるが、全体として簡明な古典主義様式に統一しながら、細部の変化を求めている。東端の低平な昆虫学・農業経済学教室対から、一番奥の農学本館時計塔にいたる高低の序列にあわせ、翼部妻面のペディメントなど古典的要素を次第に強調していく意匠と考えてよいであろう。

3　農学教室本館

農学教室本館は、コ字形に前庭を囲う配置計画の要を占める建物である。現在の農学部本館位置に重なり、同じく東向きに建っていた（c.a. 120）。一九〇一年（明治三四）六月、新築工事全体の中で、一番早く竣工している。本館主屋は木造二階建て、延床面積四五七・八坪（約一五一一平方メートル）、後方に温室、解剖室を付設していた。

本館の屋上中央には、要にふさわしく、八角ドーム、ランターン付きの時計塔がたちあげられていた。時計塔と中央翼屋を中心に、左右の両翼を張りだし、それぞれの妻面に三角ペディメントをつけた、古典主義的建築である。軒蛇腹には歯形装飾 dentils が並べられている。吹放しの正面ポーチには、台座つきのタスカン・オーダーの複柱が立てられた。下階窓は扁平な三角ペディメント付きの二連窓、上階はペディメントなしの二連窓であるが、左右両翼の二階正面のみ、大きなアーチ付き開口としている。

「農学教室之図」（図9）[27]によれば、内部一階左手が園芸学、右手が畜産学、二階左手が農学、右手が農用理学の各部に四分され、それぞれ実験室、教室、教官室などを配していた。

4　理化学及地質学教室（農芸化学教室）

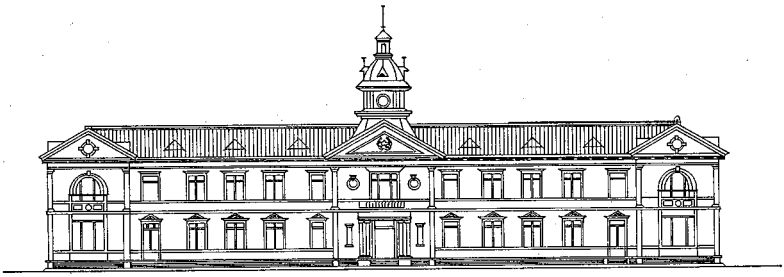
農学教室本館から見て、左手（北）の一番手前に建てられた。現在の農学部本館北翼部位置にあたる。木造平屋、二九五・八坪（約九七六平方メートル）。正面はH形に左右両翼を張りだしているが、後方は翼部が非対称に長く延び、左（西）翼は折れ曲って、中庭を囲うような平面形になっている（c.a. 122）[28]。

両翼の正面妻は、三角形下辺の水平蛇腹を切りとった broken pediment とし、中央ポーチ上も櫛形の broken pediment を繰り返している。翼部正面の開口は、中央にアーチをかけた三連窓、いわゆる Palladian window である。

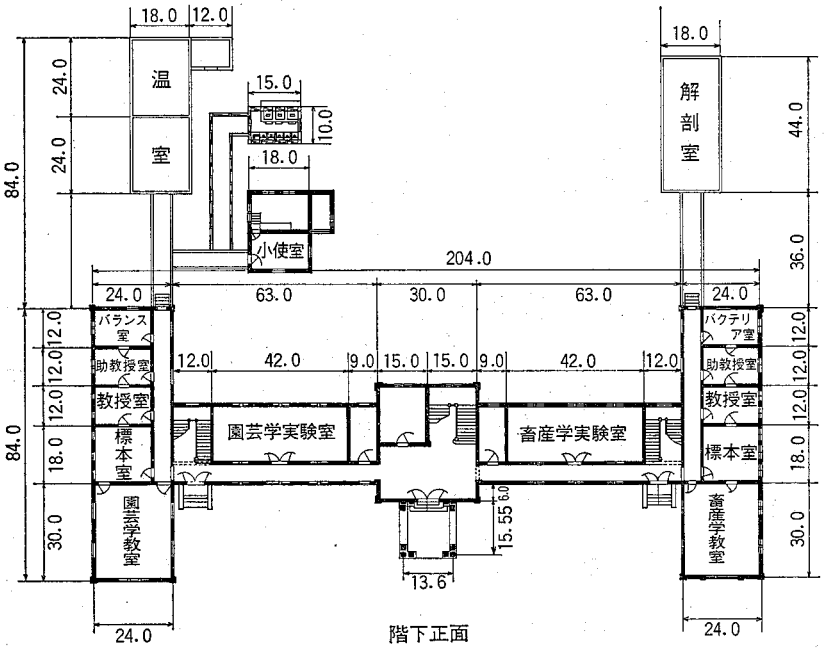
内部は、右（東）翼が物理学実験室、教室、教官室、中央がポーチをはさんで、地質、化学の標本室、教官室、左（西）翼が地質学及化学教室、農芸化学教室、定性及定量分析室、などに使われた（図10）。

5　動植物学教室

農学教室本館の右手（南）隣り、理化学教室と対をなして、動植物学教室が配置された。木造二階建て、延床面積二九八坪（約九九三平方メートル）、左手後方に煉瓦造平屋の植物腊葉室（c.a. 126）が設けられた。やはりH形平面に左右両翼を張り



正　面



階下正面

図9　札幌農学校農学教室之図（記入寸法は尺）

だし、中央に小さなポーチがつけられている（c.a. 118, 119）。

両翼正面は三角のbroken pediment とし、中央部でも軒蛇腹を切って、上に櫛形ペディメントを飾っている。向いの理化学教室と対応したデザインといえよう。開口部は単純な上下げ窓の繰り返しであるが、二階中央および左右翼部正面は三角ペディメントを飾って変化をつけている。

内部は左（東）手が植物学、右（西）手が動物学部門で、それぞれ下階に実験室、講義室、教官室を、上階に研究室、標本室を配している（図11）。

以上三棟の建物は、一九三五年（昭和一〇）農学部本館新築のため取りこわされたが、動植物学教室のうち東半分は農学部付属植物園へ移築され、同事務所として使われている。

6　図書館

キャンパスの配置計画は、農学教室を中心とする東西軸を主とし、これに直交する南北の副軸が設定されたことはすでに述べたが、この副軸上の北側には図書館、南側に大講堂が配置される予定であった。後者は実現せず、同位置に一九〇六年（明治三九）水産学教室が建てられた。図書館読書室は木造平屋九〇・二五坪（約二九八平方メートル）、後方に煉瓦造二階建て、延床面積七二坪（約二三八平方メートル）の書庫が付設された。いずれも現存しているが、読書室南側部分は後補である（c.a. 121）。

読書室はT形平面にまとめられ、袖部に事務室、書庫前室がとられた。外観は、開口部を三角、櫛形ペディメント交互配置とし、隅柱を複柱とするなど、他の建物に較べて変化に富んだデザインを示している。

7　昆虫学及養蚕学教室

図書館の東隣りに位置し、現存する（c.a. 123）。木造平屋、一二二坪（約四〇三平方メートル）の比較的簡素な建物で、H形平面に両翼部を張りだし、中央にポーチを設けている。翼部正面のみ三連窓とし、小さなペディメントをつけている。内部は中央部に教官室、標本室、右（東）翼に教室、試験室、左（西）翼に実習室を設けていた（図12）。

8　農業経済学及森林学（農政学）教室

昆虫学教室に正対し、北面した建物である。木造平屋、一四九坪（約四九二平方メートル）で、昆虫学教室とほとんど同形の建築であるが、隅の付柱を省略し、一層簡素な意匠につくられている。内部は、右（西）翼に演習室、教室、左（東）翼に普通教室、中央部に教官室と教官会議室、応接室がとられていた

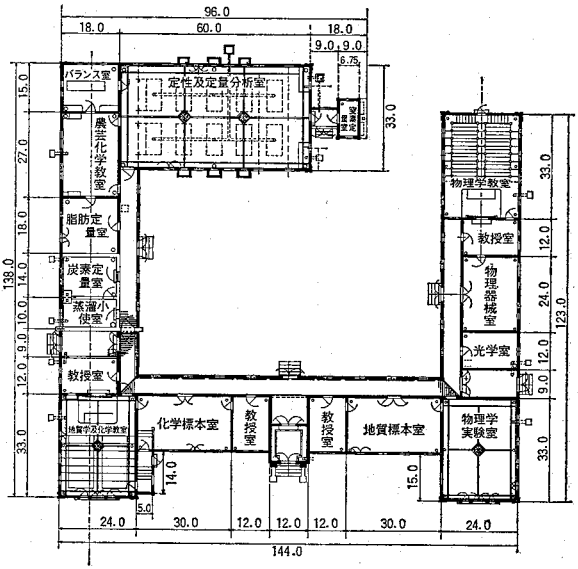


図10　札幌農学校理化学及地質学教室平面図

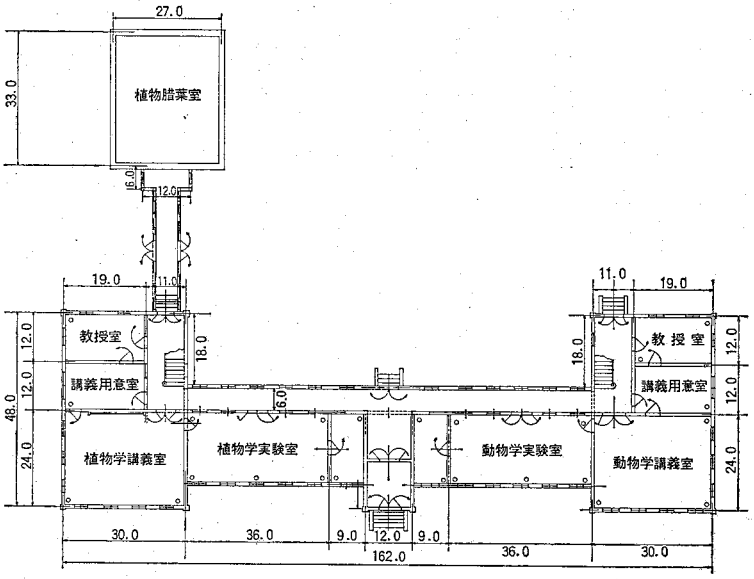


図11　札幌農学校動植物学教室１階平面図

(図13)。この建物は一九七九年(昭和五四)四月内部を焼失後、取りこわされた。

9　全体の意匠

以上、各教室の建築について眺めてきた。深い樹影の中に配置された建築群は、白漆喰塗りの外壁、瓦葺きの屋根によって、十分な統一感を印象づけてくれた。建築の意匠としては、古典様式の要素である妻破風のペディメント、軒蛇腹、ペディメント付き開口部、ピラスターなどを、簡略化しながら、かなり自由に組みあわせている。中央時計塔をのせた農学本館は、最も格式が高く、均整を重んじた古典的構成を示している。次の理化学(農芸化学)・動植物学教室の対では、broken pediment や、Palladian window を用いて、やや破調と動きのある意匠、東端の昆虫学・農業経済学教室の対では、最も簡素、平明な意匠につくられた。逆に、東側からアプローチするとき、順次、建築意匠の高まりを展開していく組み立て、と読みとることもできよう。

これらの中で、実現しなかった大講堂のみは、正面に双塔を立てたゴシック風の様式で構想されていたらしく、設計者の意図は必ずしも単純ではない。大講堂および図書館の対には、他と異なる意匠を与えて、南北の副軸をきわだたせるための配慮と考えてよいであろう。

一群の建築が、文部省技師、中條精一郎の計画、設計になることはすでにふれた。遺存する設計図面を見ると、全体の鳥瞰透視図(完成予想図。c. a. 116)および農学教室の平面、立面図が、中條の自筆と推定されるのに対し、ほかの建物の図面は筆跡が異なっている。最初に建てられた本館を自らの手で設計したあと、他の設計製図はスタッフにゆだねたのであろう。中條は、後の建築事務所でも、自ら設計することの少なかった建築家である。農学校新営工事でも、スタッフの起用を重んじたものと思われる。実際に図面を引いた担当者の好みや、癖が各建築の意匠に微妙に反映したことも想像される。ただ、右に指摘したように、全体の意匠的統一や、その展開の筋立ては一貫しているから、統率者としては十分に意を徹底させていたことに変わりはない。

10　水産学教室

一九〇六年(明治三九)十二月[29]、水産学教室が竣工した。再三述べたように、図書館の向い、大講堂予定敷地があてられた。木造二階建て、延面積四一八・七五坪(約一三八二平方メートル)の建物で、南北二翼をつないだ平面形としている。重厚な印象の建築で、持送りつきの軒蛇腹、妻のペディメン

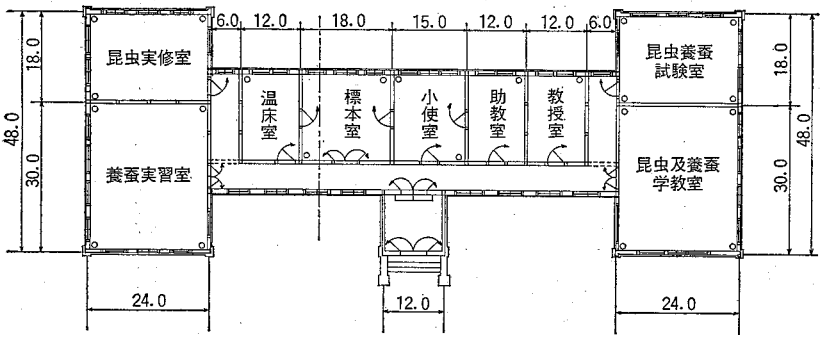


図12 札幌農学校昆虫学及養蚕学教室平面図

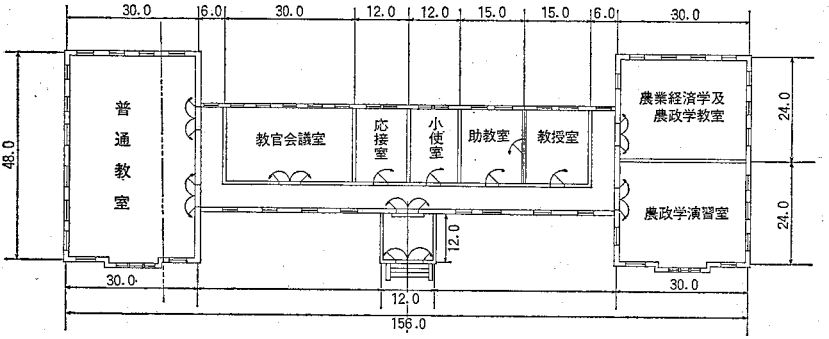


図13 札幌農学校農業経済学及森林学教室平面図

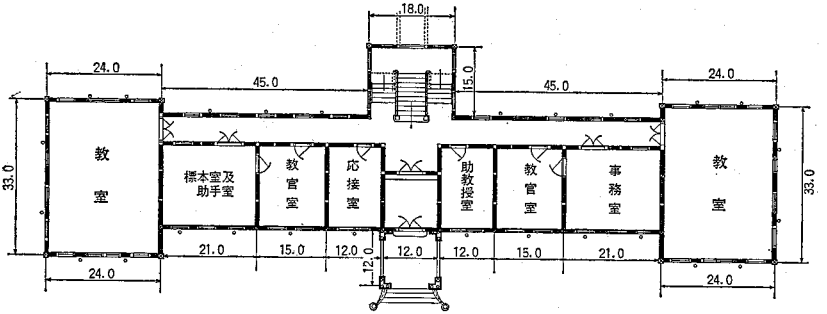


図14 東北帝国大学農科大学林学科教室1階平面図

ト、隅部の複柱など、中條設計の校舎とはかなり意匠を異にしている(c.a. 166)。設計者は、文部技手津吹亀太郎(一八六〇～?)と考えられている。(30)

11　予科教室、林学科教室、畜産学教室

一九〇七年(明治四〇)六月、札幌農学校は東北帝国大学農科大学に改組された。これにともなって、一九〇八年に予科及実科教室、翌一九〇九年に林学科教室、畜産学教室などが新営された。

予科教室は、正門北わきの現大学本部位置に建てられた。木造二階建て、延六八四坪(約二二五七平方メートル)。H形平面であるが、左右両翼の前面部は、平屋建ての階段教室としていた。内部は階段教室二を含めて、教室数一一、翼屋背後一階に化学実験室、博物実習室、二階に製図室二を設けていた。一九一九年(大正八)背後(北側)に延七二二・四坪(約二三八四平方メートル)を増築している。

一九三六年(昭和一一)、本館新築(現本部)のため、最初の建物は取りこわされたが、階段教室と増築棟は近年まで遺存していた。

林学科教室は、木造二階建て、本館の建築面積一二七・五坪、背後の標本倉庫、実験室などを含めて、総延面積四七三・五坪(約一五六三平方メートル)。左右の翼屋には、フランス風のマンサード屋根がかけられ、中央ポーチにはバラストレード形の屋根をつけるなど、一連の校舎群の中では最も様式性の高い建築である。内部は翼部に教室三と製図室、中央部に教官室、標本室などを設けていた(図14)。

この建物は、古河記念講堂として親しまれている。古河鉱業会社の古河虎之助の寄金によって建設されたものである。『北海タイムス』一九〇九年五月九日に、「古河家が十八万三千五百円を……投じて……大学予科の一棟は昨秋之が竣成を告げ……本年度に於ては農芸化学教室、林学科教室、畜産科教室及び農学科附属温室等にして……」とあるように、林学科教室ばかりでなく、この時の全建築がその寄金で建てられたのである。

畜産学教室は、林学科教室の東隣りに建てられた。木造平屋、背後の練乳室、獣医病室などを含めて三二三・五坪(約一〇六八平方メートル)の建物である。翼屋の妻面意匠は予科教室と同じであるが、中央玄関上に櫛形ペディメントを飾った、瀟洒な印象の作品であった。

これら予科、林学科、畜産学などの教室は、文部技師新山平四郎(一八六九～?)によって設計された。新山は茨城県生れ、工手学校造家学科卒業の建築家で、一八九六年文部省に入り、熊本、長崎、水戸を経て、一九〇三年中條の帰京後、札幌

へ赴任した。一時東京へもどっていたが、一九〇七年札幌出張所長に任ぜられて、これらの建築工事を統括したのである。一九〇九年秋田（鉱山専門学校）出張所長に転ずるまで、農科大学のほか、小樽高商の建築も担当したと考えられている。(30)

〔注〕

（1）一九六九年、旧農校園内の模範家畜房、穀物庫などが、一九七〇年、演武場が国の重要文化財に指定された。

（2）道庁所蔵簿書に、表記の一八八二年引継書のほか、「明治十六年　農学校引継書類」がある。内容はほぼ同じであるが、建築一覧表などの記事の細部に相異がみられる。

（3）『事業報告・家屋表』一八七六年新築の項に、「札幌学校パン焼竈・八年十二月起工・三月竣功・経費三六四円五三三」がある。

（4）農学校校長調所広丈宛、W・ホイーラー書簡。一八七七年九月二十日付。

（5）「札幌農学校官有財産目録・明治二十四年三月三十一日調」

（6）『写真集北大百年』の写真23には「明治6年の札幌……左方には……創成学校（C）がみえる」とあるが、この創成学校は化学講堂の誤りである。したがって写真は一八七七年秋から一八七八年にかけて撮影されたものである。

（7）遠藤明久「時計台の建築―成立と建築史的位置―」（札幌市教育委員会編「時計台」一九七八年十月所収）、秋月俊幸「札幌農学校と時計台」（同）

（8）越野「時計台の復原修理」（同右所収）

（9）旧 Hawthorne House, Salem, Mass. が *'Seven Gables'* と呼ばれていたなどが好例であろう。H. Morrison, *Early American Architecture*, N. Y. 1952.

（10）「昭和8年8月14日時計台を語る」「昭和33年10月16日回顧座談会」（『時計台建立80周年記念誌』一九六〇年）

（11）「二十一年一月ヨリ八月マテ　当直日誌」（北大附属図書館北方資料室所蔵）

（12）『増補第三版札幌農学校』（一九〇二年）

（13）注(10)。

（14）『創基五十年記念北海道帝国大学沿革史』所収

（15）横山尊雄、越野武「札幌農学校官舎（明治17・18年の遺構）――北海道大学付属植物園長官舎及び佐々木要氏宅等実測調査報告」（『北方文化研究』三、一九六八年）

（16）（『開拓使事業報告・家屋表』には、一八八二年一月竣工、八〇坪〇〇〇とあるが、誤記である。

（17）北海道所蔵簿書

（18）遠藤明久『開拓使営繕事業の研究』一九六一年。また博物場の建築については、横山尊雄ほか「北大農学部附属博物館の建築――演武場と博物館　その2」（『日本建築学会論文報告集』六九、一九六一年）参照。

（19）『事業報告・家屋表』には、農校園家畜房は見えないが、一八七七年の「渡島通・一号園家畜房・一四二坪八〇五・九年十月起工・九月竣功・経費四、八一三円九八八」が相当しよう。家畜房の建築については、横山尊雄ほか「札幌農学校および模範家畜房の建築について」『日本建築学会論文報告集』五七、一九五七年を参照。

(20) 『事業報告・家屋表』には該当するものがない。一八七七年新築の「小樽通・勤業課内穀物庫」があるが、面積、経費とも大きく相異している。越野武「北大第二農場穀物庫(明治10年)について」『日本建築学会論文報告集』一〇三、一九六四年参照。

(21) 石柱の数は現状二八本である。

(22) Woodward, G. E. *Woodward's Country Homes*. N. Y., 1869. 農学校旧蔵本中にこの本はないが、同じWoodwardのシリーズ本が散見される。

(23) 北大附属図書館北方資料室所蔵

(24) 中條精一郎については、主として村松貞次郎『日本近代建築史ノート』(世界書院、一九六五年)による。

(25) 図右下に中條精一郎のイニシアル「CS」のサインがある。京都大学建築史研究室石田潤一郎氏の教示による。

(26) 図は、渡辺源太郎『北海道初期洋風建築の研究』(北大卒業論文、一九五〇年)中の「配置図・原図東北帝国大学農科大学瓦斯及給水管配置図」および各教室の平面図(当時本学施設課所蔵)による。道路パターンは『札幌農学校』中の「札幌農学校改築教室予定図」にならった。

(27) 本学施設課旧蔵。ただし掲載図は新たに描き直したものである。以下同。

(28) c. a. 122. の写真には「農経・農政学講堂落成記念」とあるが、農芸化学教室の誤りである。

(29) 『創基五十年記念北海道帝国大学沿革史』などによる。『北海道大学国有財産沿革』には、一九〇七年七月二十四日竣工とある。

(30) 宮本雅明『近代日本の高等教育施設に関する史的研究』(一七九九年)による。

(北海道大学工学部助教授)